

「色覚」違い認め合う社会に

色が見え方があなたと違う人が身近にいたら……。特定の色の違いを見分けにくい色覚障害者は全国に300万人いるとされるが、周囲の誤解や偏見で悩むことが少なくない。違いを理解し誰もが暮らしやすい社会について考えるきっかけにしてみよう。県内の教員らのグループが色覚障害の男の子が主人公の英語の絵本を翻訳した。

【今野悠貴】

絵本は「エリックの赤・緑」。主人公で赤毛のエリックは元気いっぱい。でも、サッカーで相手チームにパスしてしまったり、自画像を描いたら髪の毛が緑色だったりとかクラスメートとちょっと違う。病院で調べると赤と緑が似た色に見えていた。事情を知った先生や友達にはカラフルな教科書を白黒にコピーするなどエリックの違いを受け入れて交流する——というストーリーだ。

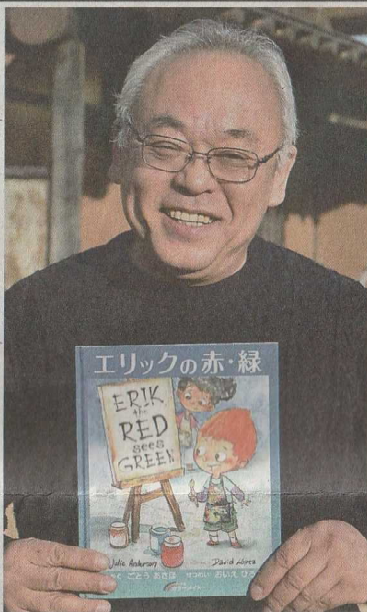
原作は2013年に米国で児童向けに発行された高い評価を得た。色覚障害について学ぶ県内の教員らでつくる「しきかく学習カラーメイト」が翻訳し、2

絵本「エリックの赤・緑」教員らが翻訳・自費出版

誤解、偏見、戸惑いなくすため



①「エリックの赤・緑」のあるページ①出版した「しきかく学習カラーメイト」代表の尾家さん



視覚障害を巡っては近年、障害を強調するよりも、誰もが使いやすいユニバーサルデザインの環境を改善しようとする考え方が広まっている。21年8月の東京パラリンピックの開催式では、選手の入場行進に使われたプラカードが、色覚障害の人に

も見やすい黒地に黄色の配色になった。社会全体でも、公共の案内表示や企業や大学の文書などで何かを明示するときに色の違いだけに頼らずマークや模様を変えたり線を引いたりする表現も少しずつ増えている。日本遺伝学会は17年から「色覚多様性」という言

ただ、多くの色覚障害者は、自らの工夫で他の人とほぼ変わらずに日常生活を過ごしている。だが、かつては色覚障害が「色盲」と呼ばれたり、目の発育不全で治すべきものと誤解されたりした時期もあった。就職や進学での制限もあり、尾家さんも父親から「大学は入学制限がある理系

には行けないよ」と言われ、「将来の道が閉ざされた気分になった」と振り返る。現在も国家資格の鉄道の運転士になるには「色覚が正常であること」が条件。交通に関する職種では他に航空機の乗組員や海技士などが制限を受け、警察官も「職務遂行に支障がないこと」などの採

用条件があり、色覚検査が課される。検査一時は廃止教育現場でも、小学校などの健康診断で全員に色覚検査を実施していたが、偏見を助長するとして02年度までで廃止になった。しか

し、進路選択時に初めて受診し障害を知った生徒が戸惑うとして、文部科学省は14年度に希望者が早い段階で調べられるよう検査制度の周知を教育委員会に通知し、各地で検査は再開している。

尾家さんは中学校教師だった40代のとき、「子供の色覚障害がもしばれたらどうしよう」と泣く母親に接し「特定の色を見分けにくい本人に注目するより、困っている人に配慮できない社会の側の問題ではないか」と思ったという。この経験をもとに「しきかく学習カラーメイト」を作り、手作りの教材や講演で色覚の知識や考え方を伝えてきた。絵本との出会いは数年前。クラスメートの違いを明るく認め合うストーリーに「色覚を特別視して正常か異常かに分けるより、違いを理解し受け入れる方が生きやすい社会になるはず」と感じた。学校生活で当事者の子どもたちが色覚の違いに戸惑うことなく、子どもたち同士互いに認め合うようになってほしい。そんな願いも込めて出版した。絵本は2750円。「しきかく学習カラーメイト」のウェブサイトで購入できる。

「障害」から「多様性」へ 環境改善の考え広まる

葉を使い始めた。尾家さんは「色覚少数者」という表現を推奨する。色覚検査で分かるのは特定の色を見分けられるかだけだ。その人にとって見えているかは誰にも分からないが、私たちは、自分が見えている色は他の人にも同じように見えているはずだ、と思いついて。尾家さんは、再開した学校現場での色覚検査について、本人が色覚への理解が乏しいまま突然「異常」と突きつけられる状況を危惧し、「語り」。子供たちが、違いを面白く感じる社会であってほしい」